

第二節 縄文時代

縄文時代のはじまり

縄文時代人は、すぐれた狩人であり、漁師であった。旧石器時代人の考えつかなかった弓矢を発明して獣や鳥を狩り、海や川で魚や貝をとり、山野では、木の実や草の根などを集めて食料にした。土器を発明して食物を煮て食べることもするようになった。弓矢と土器の発明は、縄文人の生活を大きく変えていった。縄文時代は、現在土器の移り変わりから、大きく草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の六期に区分されており、およそ一万年前から二三〇〇年前ごろまでの間続いた。縄文時代の文化は、地域的な特色をもちながらも、全国的にはほぼ同じような文化内容をもって発展していったことが知られているが、生活の基本となるのは、はじめから最後まで狩猟、漁撈、木の実の採集を中心とする採集生活であった。

およそ一万数千年前ごろ、最後の氷河期も終りをつけると、気候はしだいに温暖化に向った。極地にひろがっていた氷河も溶けはじめ、水が海に入ってきた。海面はしだいに上昇し、海水は大陸棚を浸し、陸地の奥深くまで入り込んできた。氷河期には、大陸と陸続きであった日本も大陸とは完全に切り離され、日本列島となった。瀬戸内地域へも少しずつ海水が浸入しはじめてきたのである。それでも縄文時代のはじめごろには、まだ気温は低く、瀬戸内地域には、湖沼や草原のところが多くみられたらしい（図2-2-1）。しかし、縄文時代の早期の終りごろから前期のはじめごろになると気温は上昇し、海面は最も高くなってきた。瀬戸内も現在のよう

浜での魚・貝類の採拾を可能にできたのである。このように気候の変動は、周囲の地形や環境に変化をもたらし、ひいては、縄文人の食料採集の生活にも大きな変化と拡大をもたらした。人々は、食物の獲得しやすい丘の上や海浜にかくに住居を構えることが多くなってきた。しかし、こうした採集に頼る生活は、一方では自然環境の変化にすぐに影響されやすいものであった。縄文人の生活は、まだまだきびしい不安定なものであったのである。

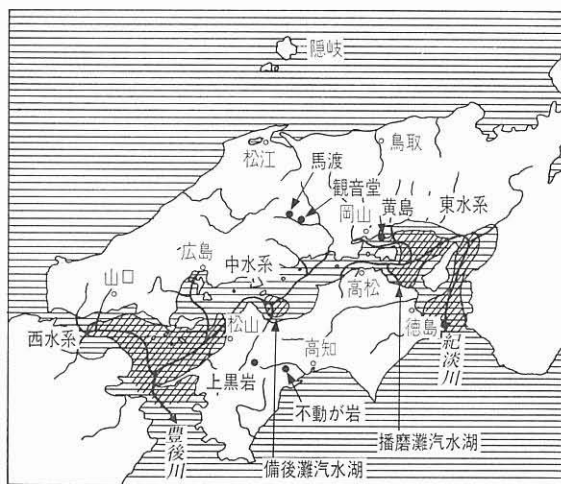


図2-2-1 後氷期はじめの瀬戸内(『古代の日本』
4、1970年より)

な内海となってきたのである。洪積世の間、陸橋をつたつて列島へやってきていたマンモスゾウやナウマンゾウ、オツノシカなどの大型動物はしだいに姿を消し、代わってニホンシカ、イノシシ、クマ、ウサギなどの中・小型動物や鳥類が増え、現在とあまり変わらない動物相となってきた。植物も、カラマツ、トウヒ類などの亜寒帯針葉樹林は、低地から高地へ移動し、低地には、暖帯、温帯性の広葉樹林がひろがってきた。中部地方を境に、西日本には暖帯広葉樹林帯（照葉樹林帯）、中部以東には温帯落葉広葉樹林帯となっており、クリ、クルミ、トチ、ドングリ類など食用となる木の実が増え、縄文人の主要な食料となってきた。

渡辺誠『縄文時代のた植物食』一九七五年。さらに、気温の上昇と海面の上昇は、海

瀬戸内海の形成

縄文時代のはじめごろからはじまった気候の温暖化に伴う海水面の上昇は、縄文早期（約八〇〇〇年前ごろ）の後半ごろから一段と速度をはやめ、縄文前期（約六〇〇〇年前ごろ）のころには、最高に達したといわれている。現在のような瀬戸内海が形成されるのもこの時期である。内海のできる様子は、沿岸、島しょ部に残された貝塚からもしることができ、縄文早期中ごろを代表する押型文土器を出す岡山県の黄島貝塚では、最下層には、塩分のうすい河口などに棲むヤマトシジミを主体とする貝層があるが、上層になるにつれ、ヤマトシジミは減って、ハイガイやマガキなど塩分濃度の濃い鹹水性の貝類が多くなる。これは、貝塚が形成されはじめたころは、付近は、まだ湖のような状態であったのが、後半には、紀伊水道からしだいに海水が浸入して、黄島が、内海に浮ぶ島になっていたことをしめしている（鎌木義昌『備前黄島貝塚の研究』、『吉備考古』七七、一九四九年）。一方、西部瀬戸内地域では、広島湾岸の広島市牛田早稲田山遺跡や円明寺遺跡、利松住吉遺跡（佐伯区）など押型文土器を出す遺跡は、現在の海面より二〇～三〇メートルのところに位置しながらも貝塚を形成しているものはない。この時期には、魚介類を採捕できる環境になかったと考えざるをえない。海底地形からみても、この地域には、まだ陸地として残るところが多かったとみられる。しかし、縄文前期の遺跡は、廿日市町地御前南町遺跡や山口県熊毛半島東岸の柳井市与浦遺跡、黒島浜遺跡などのように海浜ちかくに位置し、遺物包含層が、現在の海面より下位もしくは同じ高さに存在するものがみられることは、縄文早期後半から前期にかけるころには、西部瀬戸内地域にも海水が浸入してきたことをしめしている。

内海形成の要因となった海面上昇（海進）も縄文前期前半ごろには一応安定し、前期後半ごろからは、しだいに低下（海退）の傾向をたどるといわれている。これ以降になると人々は、瀬戸内沿岸の海浜部ちかくに住居を構え、背後の山野での狩りと木の実類の採集、海浜や川での魚介類の採拾を主体とした生活をはじめてくる。そ

して、縄文後期(約四〇〇〇年前ごろ)以降になると、内海へ注ぐ河川から流れる土砂は、湾や入江を埋めはじめ、縄文晩期(約三〇〇〇年前ごろ)のころには、海岸部には、肥沃な沖積低地が形成されるようになる。広島湾の比治山貝塚(広島市)では、鹹水性のアサリは下層に多く、上層には少なく、また、淡水の流れこむような砂地に多く棲むハイガイが、下層にはなくて上層にのみ出土することは、縄文後期ごろは、比治山は、まだ湾内に浮ぶ島であったものが、晩期後半ごろには、太田川の流れ出す土砂によって、島の周囲に遠浅の泥砂洲がひろがりはじめたことをしめしている。稲葉明彦「広島市比治山貝塚出土土類」『広島県史蹟名勝天然記念物調査報告』第六集一九五一年この沿岸部の沖積低地こそ、つぎの弥生時代の稲作の舞台となるものであった。

縄文人とその生活

わが国で発見された縄文時代人骨は、すでに数千体にのぼっている。縄文早期・前期のころの人骨は、脳頭蓋の大きさは、他の時期の縄文人とあまり違わないが、顔は上下に短い顔型で、顎も発達が悪く、弱小なものが目立っている。歯は鉗子状咬合で、強くそしやくしたためか、よく磨耗しており、体の骨も細く小さい「きゃしゃ」な特徴をもっている。これに対して縄文中期以降の人骨は、顔は下と前方に伸び、体の骨も太くて大きくなっており、やや大がらで「がんじょう」になってくるとされている。山口敏「縄文人骨」『縄文文化の研究』一、一九八二年。このように骨太で、がんじょうな体をもっていたにもかかわらず、縄文人の寿命は、意外に短いものであったらしく、死亡例の多い年齢は、女性が二〇〜二四歳、男性で三〇〜三四歳であったといわれている。小林和正編「人類学講座」人口、一九七九年。氣候の変化によって大きな影響を受けやすい採集生活は、しばしば食料不足の状態に追いこまれ、これに対応するための絶え間ない移動と労働の激化が寿命を縮めていたにちがいない。

縄文人の住居は、はじめから地面を掘りくぼめて作った竪穴式住居たてあなしきが一般的であった。住居は、食料となる獣や魚がよく集まり、木の実などの採集しやすい海浜や川にちかい丘の上や台地の上につくられたものが多かつ

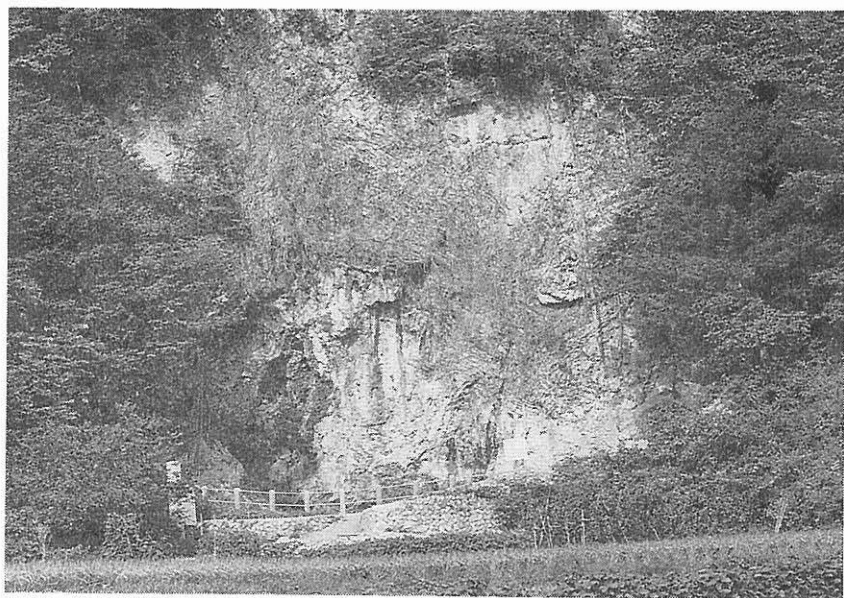


図2-2-2 岩陰の住居（帝釈寄倉岩陰遺跡）

た。中国地方では、縄文時代の竪穴住居の発見例は少ないが、三次市松ヶ迫遺跡では、谷にのぞむ丘陵上から縄文早期の小型の円形竪穴式住居址が発見されている。このほか、帝釈峡遺跡群のよう

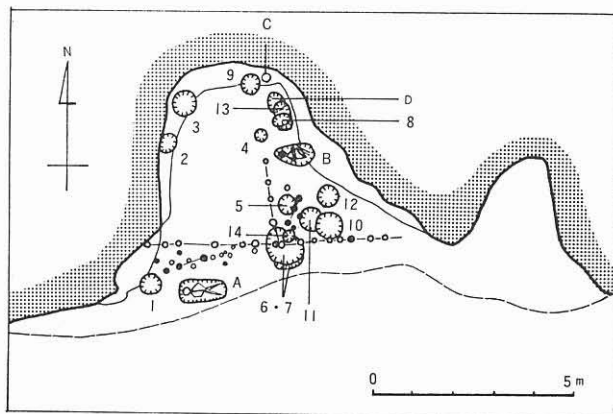


図2-2-3 岩陰住居の例（比婆郡東城町帝釈名越岩陰遺跡、柱穴列・竪穴・埋葬人骨など『帝釈峡遺跡群』1976年より）

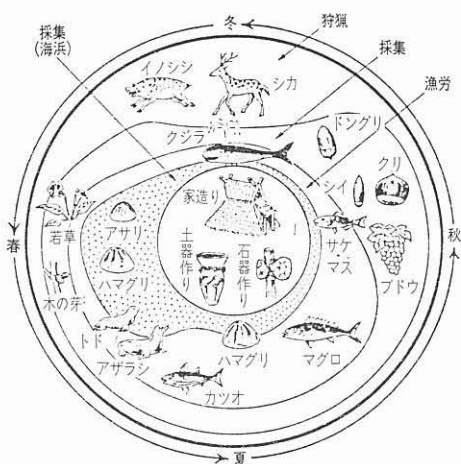


図2-2-4 縄文人の生活 (『日本生活文化史』1、1975年より)

に雨・風の避けやすい洞穴入口や岩かげなどに、簡単な覆いをして住居にした例もあった(図2-2-2、3)。これらの住居は、数戸ないし一〇戸ほどが集まって一つの集落を形成した。集落は一〇人前後の小さいものから五〇人ちかくの大きなものまであったようである。中部地方や関東地方の調査によると、集落には中央に広場があり、広場をめぐるように住居が建てられ、なかには集会所や倉庫、作業場とおもわれる大きな建物もあった。集落のまわりには、墓地ができ、不用品や食べかすを処理する場所もできた。中央の広場では、宗教的な祭りや集會が行われたほか、女性達が土器をつくったり、食料加工をし、男性達が獲物の解体や石器をつくったりしたようである。人々は、この集落を根拠にして、春には海浜でアサリ、ハマグリなどの貝を採り、若草や木の芽をつみ、夏には海に出て漁をし、秋にはクリ、クルミ、ドングリなどを拾い、通年の食料とした。また、秋から冬には、山野でシカ、イノシシなどを追う狩りを行うといった一年間の生活のサイクルによっていたようである(図2-2-4)。

そして、これらの活動の合い間には、石器や土器をつくったり、住居の建てかえなどの仕事をしていたとおもわれる。

石器

縄文時代の主要な石器には、石鏃(せきぞう)、スクレーパー(刃器)、石匙(いしき)、石斧、石皿、磨石などがあつた。なかでも石鏃は、縄文人の狩猟の対象となつたシカやイノシシ、ノウサギ、鳥など動きの早い中・小型動物の狩猟具として大きな力を発揮した。石鏃は、縄文時代のはじめから完成された形をもっている。また、石匙やスクレーパー

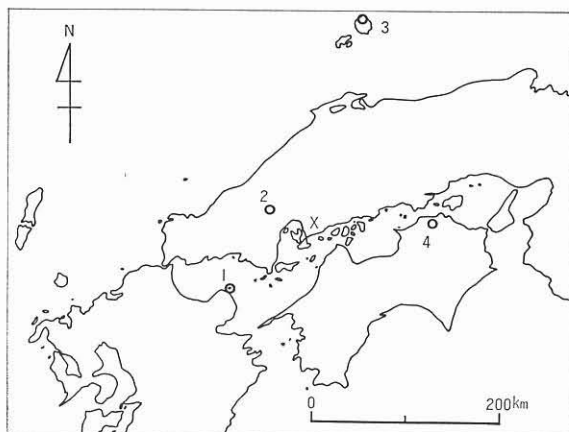


図2-2-5 熊野町へ搬入された石器石材の産出地

×は熊野町

1 姫島(黒曜石)

2 冠山(安山岩)

3 隠岐島久見(黒曜石)

4 金山(安山岩)

道具をつくるのに適していたからにちがいない。熊野町の道上遺跡、柳ノ本遺跡出土の石器類には、広島、山口県境の冠山産出のものと四国香川県の金山・五色台産出の安山岩が使われているほか、島根県隠岐島久見産出と大分県姫島産出の黒曜石が使われている(図2-2-5)。熊野町から金山までは、直線距離で約一三〇キロ、冠山まで約五〇キロ、隠岐久見まで約二三〇キロ、姫島まで約一〇〇キロも離れている。石器石材の入手のためには、かなり遠くの地域と交易を行っていたことをうかがわせる。このような石材の流れは、当然逆に流れる品物があったのであろう。

は、一方の側縁に刃がつけられており、獲物の解体・調理具として使われたものであろう。縄文時代のはじめごろにみられる石槍も刺突具として有効な道具であったし、磨製・打製の石斧は、住居の建築材の伐採具や堅穴・おとし穴を掘るのに有効であった。石皿や磨石は、木の実などを砕いてすりつぶし、粉にする道具として使われたものであろう。これらの石器に使われた石をみると、石斧や石皿には、集落のちかくでも比較的求めやすい流紋岩や砂岩を使用したものが多いが、石鏃やスクレーパーなどでは、安山岩や黒曜石など遠くからもちこまれた石が多く使われている。これらの石が小型の鋭利な

このほか、骨角製品や貝製品も縄文時代には、非常に発達した。骨角器は、ヨーロッパでは後期旧石器時代からさかんに製作されたものであるが、日本では、縄文時代になってから漁具、装身具として使われるようになった。帝釈観音堂洞窟遺跡では、鹿角製の釣針やヤス、ヘヤピン状・ペンダント状の骨角器が多数出土している。また、貝製品でも、貝製腕輪（貝輪）、首飾りなどが多くみられるようになってきた。

縄文土器

食物を煮たり、貯蔵したりする土器は、縄文人の生活のかなめの道具であった。土器の形や文様は、地域ごと時期ごとに一定の特色をもっており、この分布の特色から当時の人々の活動や交流をしる手がかりともなっている。帝釈馬渡岩陰遺跡第四層からは、有茎尖頭器、石鏃などともに口径、高さとも二〇センチ前後の小型の鉢形土器が出土した。平底で胎土に多量の植物性繊維が含まれ、表面には、煤が付着しており、煮炊きに使われたことをしめしている。形や特徴からわが国で最も古く製作された土器の仲間である。縄文時代のはじめには、平底で小型の鉢形土器が一般的であったが、土器製作法の進歩とともに大型化、深鉢化を示し、器壁もしだいに薄くなり、表面は、いろいろな文様で飾られるようになる。器形では、鉢のほか浅鉢、皿、注口土器なども出現する。煮炊き以外の貯蔵や盛りつけ用、飲み物用として使われはじめたことをしめしている。これは、人々の生活がしだいに複雑なものへ変化しつつあったことをあらわすものであろう（図2-2-6）。

広島湾岸では、いまのところ縄文早期の押型文土器が最も古い土器である。押型文土器は、器表面に山形や楕円の文様がつけられており、砲弾形をなし底は尖っている。広島市牛田早稲田山遺跡、矢野小学校校庭遺跡、円明寺遺跡、利松住吉遺跡などで発見されている。つぎの縄文前期・中期の土器は、広島周辺では、類例がひじょうに少ないが、前期のものとしては、佐伯郡廿日市町地御前南町遺跡、上平良大原遺跡、円明寺遺跡、呉市郷原遺跡、熊野町道上遺跡でみつまっている。これらの土器は、薄手で表面に爪形文や刺突文、条痕文のめぐらさ

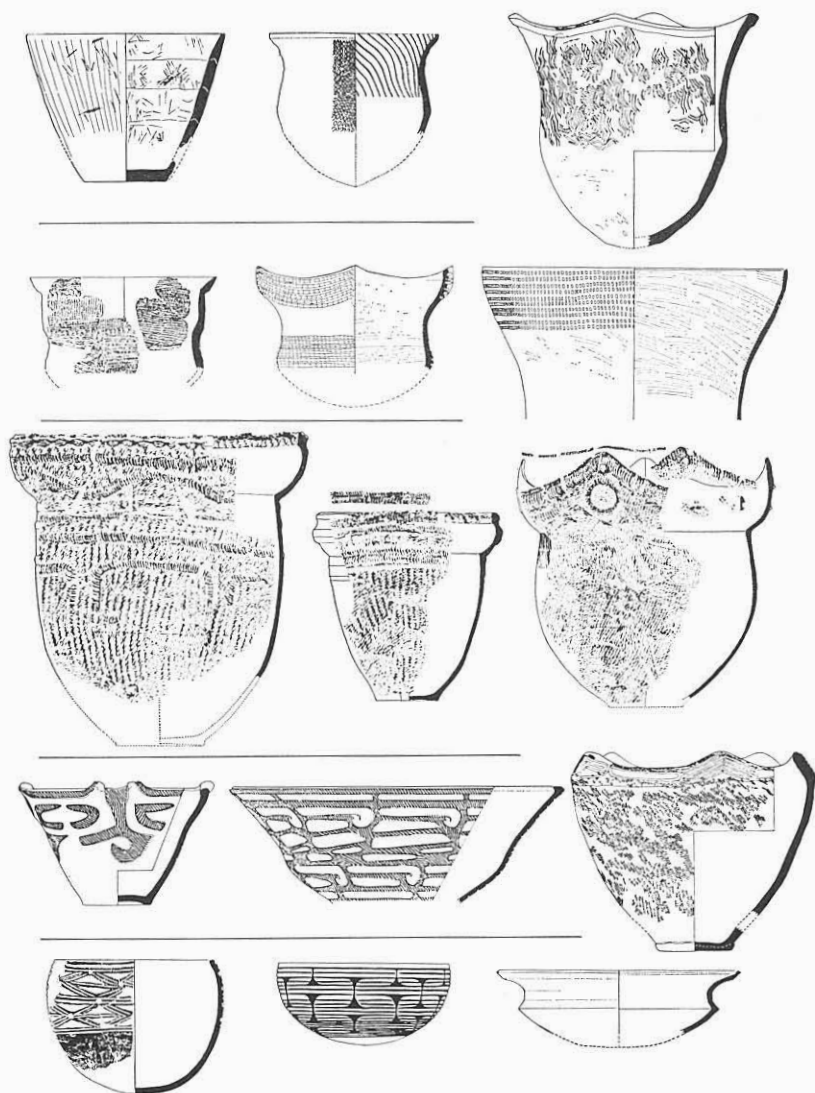


図2-2-6 縄文土器の移りかわり（上段より早期・前期・中期・後期・晩期）

れた縄文前期前半の羽島下層式土器(岡山県羽島貝塚出土)であるが、なかには、大原遺跡や道上遺跡出土土器のように九州の藤式土器(熊本県藤原遺跡出土)の影響とみられる表面にミミズバレ状の隆帯のめぐらされた土器もある。縄文中期の土は、地御前南町遺跡、郷原遺跡、五日市小学校々庭遺跡(広島市佐伯区)でみつかつている。厚手の土器で、表面に貼りつけられた凸帯(とつたい)の上に爪形状の刻み目(きざめ)をもつものや半截竹管文(はんせつちくかんもん)(半分に割った竹の背や腹の部分を使って文様をつけたもの)のめぐらされたものなどがある。このように広島湾岸で縄文前・中期の遺跡が少ないことは、地御前南町遺跡の前・中期の遺物包含層が、現在の海面より下に位置することからすると、この時期の遺跡の多くが、海面より下に埋没してしまっているのかもしれない。『河瀬正利』『広島県佐伯郡廿日市町地御前南遺跡出土の遺物について』、『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』Ⅶ、一九八四年。

つぎの縄文後期になると、採集社会の発展と人口の増加に伴って遺跡は急激に増えてくる。広島湾岸でも比治山貝塚、地御前南町遺跡、円明寺遺跡、五日市小学校々庭遺跡、道上遺跡などがある。土器は厚手で表面に磨消(すりけし)縄文や沈線文(ちんせんもん)をもつもの、口縁部に刻み目をもつもの、貝殻条痕文(かいがらじようこんもん)のめぐらされたものなどがある。深鉢形(せせい)の大型の粗製土器(そせい)のほかに、表面がよく磨かれて光沢をもつ精製土器(せいせい)も出現する。土器の製作・焼成法に変化があらわれてきたことをしめしている。器形は、小型の浅鉢、皿などが増え、用途に応じて製作されるようになったらしい。この土器の精製・粗製の区別や器種の多様化は、つぎの縄文晩期になるとさらに進み、用途による土器の製作法に違いがあったことが、より明瞭になってくる。広島市の中山貝塚や比治山貝塚では、貝層下の包含層や貝層から、凸帯やヘラ描き沈線文をめぐらした深鉢形土器と表面のよく磨かれた浅鉢形土器とが出土しており、用途に応じて、粗製・精製の区別がなされていたことがうかがえる。

墓地

縄文時代には、死者の体は、土墳墓(どこうぼ)と呼ばれる地面に掘られた楕円形の穴(壙)の中に埋葬されることが多かった。埋葬される場所も、生活する場とは区別されていたようである。帝釈峡遺跡群の帝釈観音堂(かんのんどう)



図2-2-7 屈葬人骨（豊松堂面洞窟遺跡）

洞窟遺跡や帝釈寄倉遺跡（東城町）、豊松堂面洞窟遺跡（豊松村）などの洞穴・岩陰遺跡では、埋葬場所は岩壁よりや洞穴奥部に葬られた場合が多いし、尾道市の大田貝塚で発見された七〇体ちかくにのぼる人骨群も細かな出土状態は明らかでないが、日常の生活場所とは異なる場所に集中して埋葬されていたと考えられている。潮見浩ほか「広島県調査報告」第九集、一九七一年また、埋葬される姿勢には、手足を折り曲げて葬られた屈葬と、手足を伸ばしたまま葬る伸展葬とがあった。縄文早期・前期のころには、屈葬が中心であったが、中期以降になると伸展葬があらわれ、晩期にいたるまで屈葬とともに行われた。縄文早期や後晩期の人骨の多い帝釈峽遺跡群では、屈葬が大半を占め、縄文中期を中心とする大田貝塚の人骨では伸展葬が多いということからもうなづかれる。この屈葬の意義は、胎児と同じ姿勢をとらせることにより、死者を大地に還元させるという説と手足を折り曲げることにより、死者の霊が地上にさまよい出て、残った人々に危害を加えないようにしたとする説が有力である。帝釈峽遺跡群

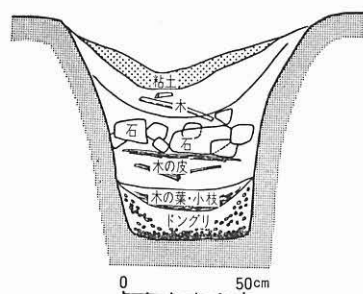


図2-2-8 木の実は貯蔵穴
(山口県岩田遺跡「岩田遺跡」
1974年より)

で、屈葬人骨の上に石を置いたり、石を抱かせたりした例が多いことは、この二つの説の両方を裏づけるようである(図2-2-7)。このほか、縄文中期以降になると、幼児骨を埋納した埋甕や一度埋葬した骨を、ある一定の期間がすぎたから、もう一度掘り出して、洗ったり、赤色顔料を塗ったりして、再び埋葬しなおした二次葬なども行われるようになった。埋甕は、住居の入口ちかくの床面に埋められる例が多く、人の出入りの多いところに幼児の骨を埋葬して、母の胎内に再び新しい生命が宿ることを願う思想のあらわれから生れたものといわれている。人々の精神生活もしいに複雑化していったことがしられるであろう。

木の実は貯蔵と農耕の芽ばえ

先きに述べたように、縄文前期以降、日本の植生帯は西日本は照葉樹林帯、中部から関東地方にかけては、落葉広葉樹林帯がひろがっていった。東日本に

イ、カシ類が多くみられるようになった。これらの木の実は貯蔵のなかに、アケ抜きをしないと食べられないものも多かった。水にさらしたり、加熱したりすることが必要であったのである。縄文晩期の岡山県南方前池遺跡、舟津原遺跡、山口県の岩田遺跡などで、住居にちかい谷あい、湧水のあるところや地下流水のあるところからドングリ類を保存貯蔵したとみられる堅穴貯蔵穴が発見されていることは、貯蔵穴群が、水さらしの機能をもつものであったことをうかがわせる(図2-2-8)。このように、縄文人が、単に木の実類を採集するだけでなく、それらを保存、貯蔵して年間の食料としていたことは、当時すでに木の実の栽培が行われていたことまでも推測させるもの

である。さらに、アク抜き法の習得は、発見は困難であるが、クズやワラビなどにも利用されたであろうし、ヒョウタンやアワ、ソバなども当然食用になっていたのであろう。晩期の遺跡から土掘り具とみられる打製の石斧や収穫具の磨製の石鎌状石器や石庖丁形石器が出土することは、根茎類を掘ったり、雑穀類を刈って食料にしていたことをしめしており、初步的な農耕が始まっていたことを想定させる。採集生活の行きづまりとともに、新しい食料生産の気運が高まってきたのである。

熊野町周辺の縄文時代遺跡

熊野町の縄文時代遺跡には、ハグイ原遺跡、道上遺跡、柳ノ本遺跡、東深原遺跡、畦地遺跡^{あぜち}、九ノ通遺跡などがある。調査された例がなく細かな内容は明らかでないが、縄文時代全般にわたる土器、石器がみつかっている。

ハグイ原遺跡 熊野町大字呉地字ハグイ原

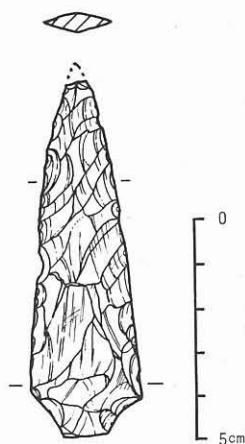


図2-2-9 ハグイ原遺跡出土有茎尖頭器

熊野町の南端にちかい呉地ダム付近に位置する。ダムの工事中に有茎尖頭器^{ゆうけいせんとうき}一点が採集されている。尖頭器は、先端部をわずかに欠失するが、現存で長さ八・二センチ、幅二・五センチ、厚さ〇・八センチの柳葉形をなし、断面は菱形である。基部には、短かい逆刺^{かえり}をもっており、両面とも長細の平行剝離調整がほどこされている（図2-2-9）。狩猟用の槍先として使われたものであろう。単独で採集されたもので、時期や遺跡の内容などについては、明らかにできないが、形態や調整の特徴からみて土器出現以前に位置づけられるものであろう。呉地オノ神の河岸段丘上からも出土したといわれているが、遺物が散逸しており、内容は明らかでない。



図2-2-10 道上遺跡

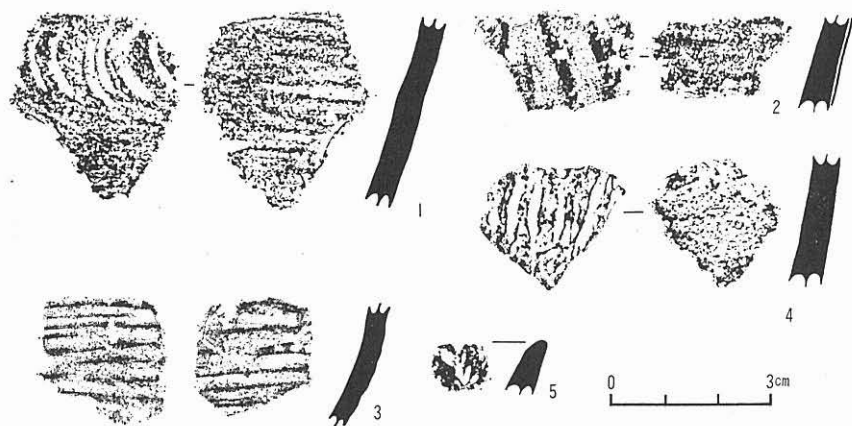


図2-2-11 道上遺跡出土の縄文土器

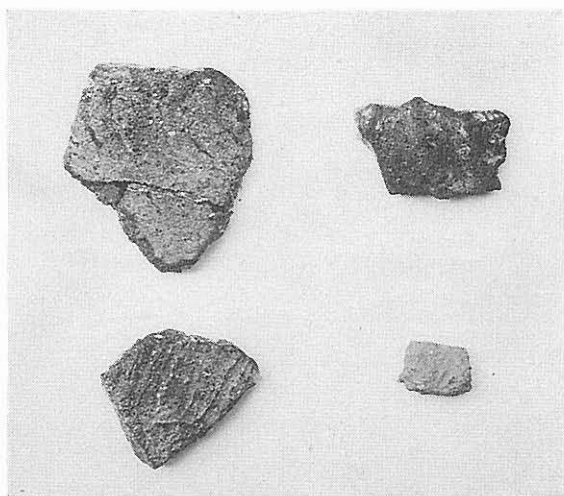


図2-2-12 道上遺跡出土の縄文土器

道上遺跡 熊野町大字萩原字道上

南から北へのびる丘陵先端部に位置し、遺跡の前には道上川が東から西へ流れている（図2-2-10）。遺物は、低い丘陵の東側から北側にかけての緩やかな斜面から採集されており、かなり広い範囲にわたって遺跡がひろがっていると考えられる。縄文土器、石器、剥片類が多数採集されており、石器は五〇点以上に及んでいる。土器では、表面にミミズバレ状の隆帯がめぐらされ、内面は貝殻条痕（かいがらしようこん）により調整されたものがある（図2-2-11・2）。九州の縄文系統の土器で、縄文前期前半のものと推定される。このほか、表面に大型のC字状の連続する爪形文がめぐらされ、内面は条痕調整のほどこされた薄手の土器（図2-2-11・1）や内外面ともに貝殻による条痕調整のほどこされた土器（図2-2-11・3）など縄文前期の土器があり、また、土器表面に縦に走る条痕がほどこされたもの（図2-2-11・4）や口縁端部に細かな縄文のめぐるもの（図2-2-11・5）などもみつかっている。縄文後期ごろのものであるろう。

石器では、石鏃、石匙（いしきし）、スクレーパー、楔形石器（くさびがた）などがみつかっている（図2-2-13）。石鏃には、基部に抉（えぐ）りのあるもの（凹基式）と基部が直線的なもの（平基式）、基部が尖るもの（凸基式）の三種がある。基部に抉りのあるグループには、抉りが深くて三角形にちかい形のもの（平基式）と細身に抉りが浅く、二等辺三角形にちかいもの（凹基式）とがある。

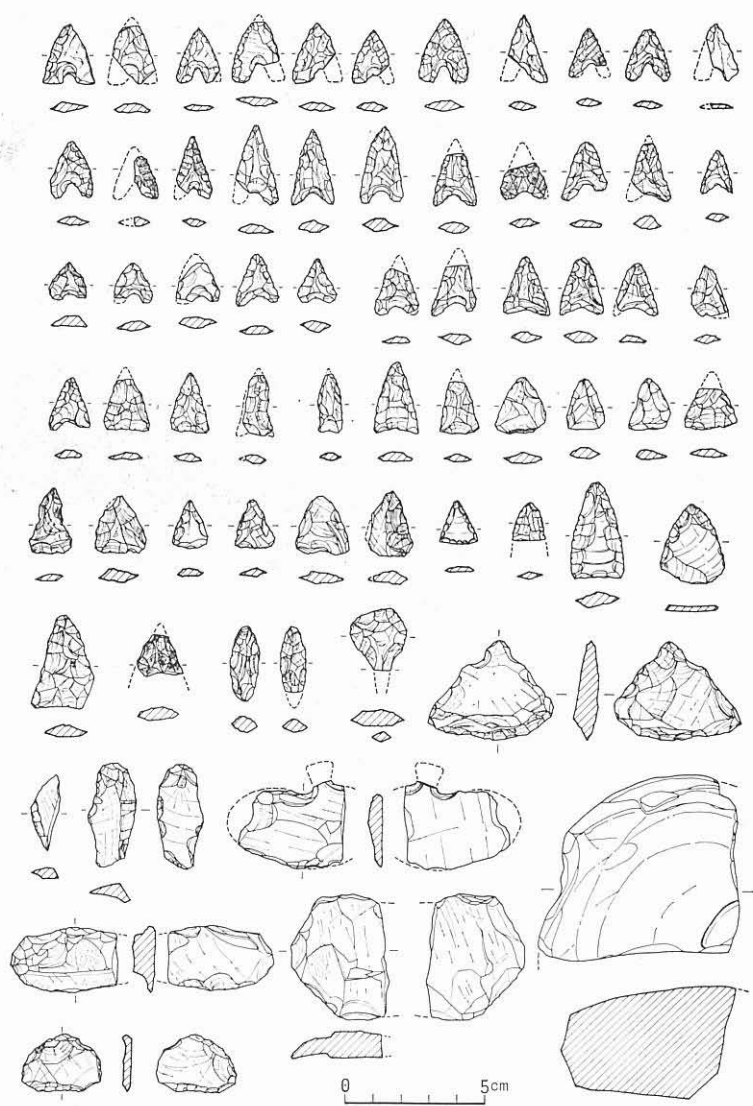


図 2—2—13 道上遺跡出土の石器類



図2-2-14 柳ノ本遺跡

る。つくられた時期を決定することは困難であるが、三角形にちかく、両脚が角状をなし、挟りが深くて丸くなる形態のものは、縄文早期の押型文土器に伴う例が多い。また、側縁が内反りで、上部に段をもつものは、縄文晩期の特徴をもっている。基部の尖るものは、周辺地域では、類例は少ないが、呉市郷原遺跡や岡山県羽島貝塚^{はしま}、里木貝塚^{さとぎ}などの出土例から縄文前期ごろのものとおもわれる。石匙は二点が採集されている。

いずれも横形のもので、上端のつまみ部と下端の刃部に調整がほどこされている。縄文時代のはじめごろのものであろう。

柳ノ本遺跡 熊野町大字平谷字柳ノ本

東北にのびる丘陵の先端部に位置し、丘陵の東側を流れる平谷川からの高さは、約一〇～二〇メートルである（図2-2-14）。採集された遺物には、石鏃、スクレーパー、剝片類がある（図2-2-15）。石鏃は、基部に挟りのある凹基式と挟りのない平基

東深原遺跡 熊野町大字新宮字深原

式とがあり、挟りのあるグループでは、二等辺三角形にちかく、挟りのやや深いものと挟りが浅く、側辺がやや内反り気味で上部に段のつく細身のものがある。スクレーパーは、両側辺が細かく調整されて刃となつてい
る。獣の解体、皮はぎなどに使われたものであろう。このほか、定型的な石器でないが、加工のほどこされた剥
片も出土している。石器・剥片の特徴からみて縄文時代の全般にわたる遺物とおもわれる。

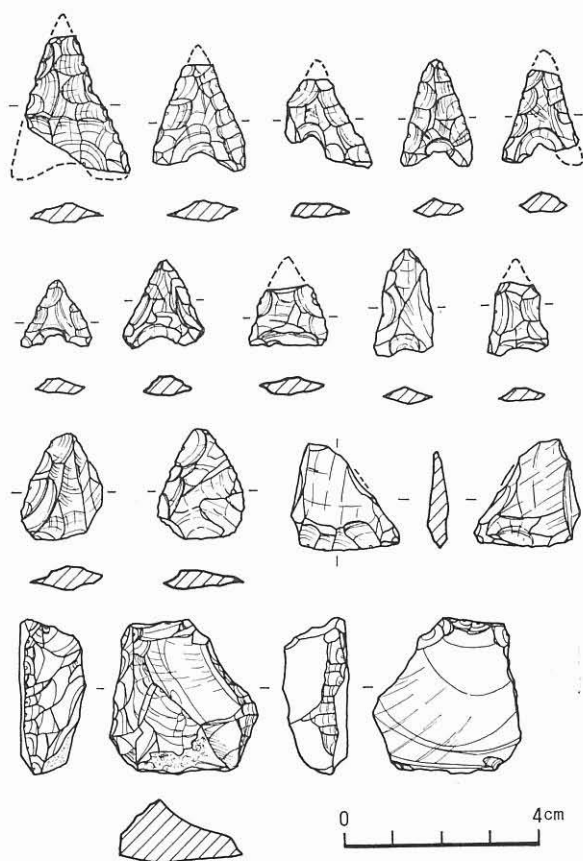


図2-2-15 柳ノ本遺跡出土の石器

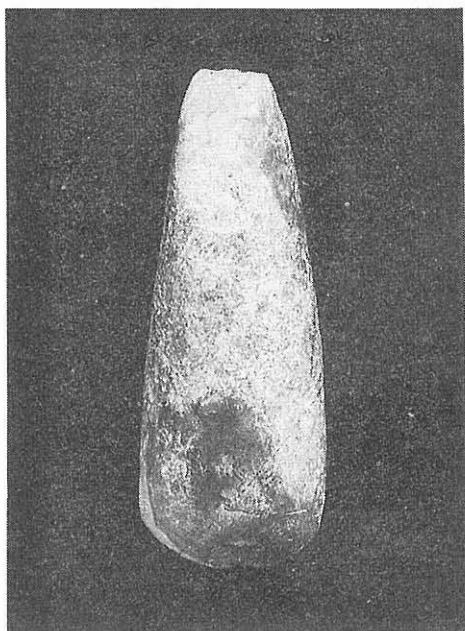


図2-2-16 東深原遺跡の磨製石斧



図2-2-17 磨製石斧の刃部の使用痕

前節で紹介した局部磨製石斧のほか、磨製石斧一点と石皿、磨石が採集されている。磨製石斧は、基部が少し欠損するが、長さ一六・七センチ、厚さ三・四センチの大きさがある。流紋岩製の扁平な石を使用し、研磨を加えている。刃部は丸く両刃で、使用痕とみられる細かな擦痕がみとめられる(図2-2-16、17)。基部の片面には、長方形のややくぼんだ部分がみられる。柄をつけるためのものである。住居の建築材の伐り出しや加工に使用されたものとみられる。石皿、磨石(図2-2-18、19)は、木の実類を砕き、すりつぶして粉にする道具といわれており、縄文時代の食品加工の方法を知る上で貴重な資料となるものである。

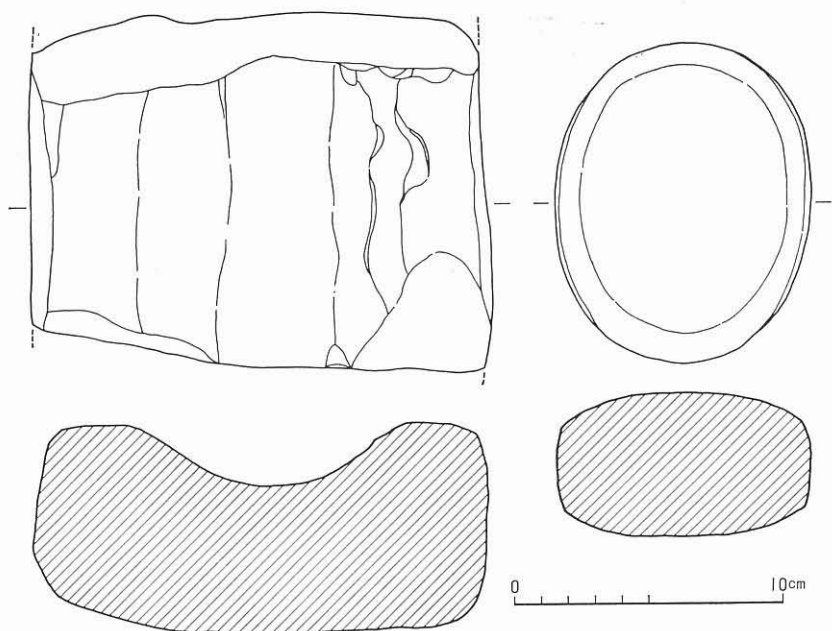


図2-2-18 東深原遺跡出土の石皿・磨石

畦地遺跡 熊野町大字初神字畦地

西から東へのびる低丘陵の先端部に位置している。尖頭器一点、石鏃一点(図2-2-20)のほか歴史時代の土師質土器片が採集されている。尖頭器は、長さ四・〇センチ、厚さ〇・九センチの水晶製で断面は菱形である。器体と基部の境は明瞭でないが、基部を逆二等辺三角形につくり出しており、有茎尖頭器とみられる。先端は鋭さに欠けるが、縁辺部に調整がほどこされている。石鏃は正三角形を呈し、基部の挟りは深い。安山岩製の縦長剝片を素材とし、表裏両面とも加工調整がほどこされている。いずれも縄文早期ごろのものと推定される。

このように、熊野町の縄文時代遺跡は、標高二〇〇〜二五〇メートル前後の熊野盆地の縁辺で、盆地への入口部や熊野川、二河川およびその支流の形成した沖積低地を前面にのぞむ小高い場所に位置するものが多い。こうした場所は、食料とな

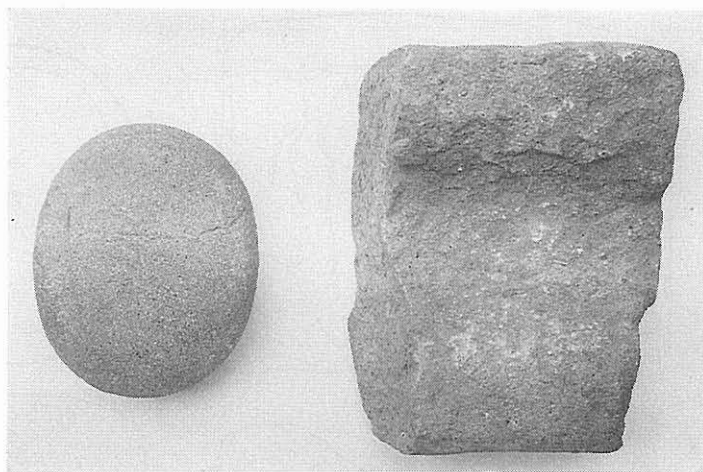


図2-2-19 東深原遺跡出土の石皿・磨石

い範囲に及ぶ文化的交流があったことをよくあらわしている。当時の人々の生活は、狩猟と木の実の採集を中心に行っていたことがうかがえる。

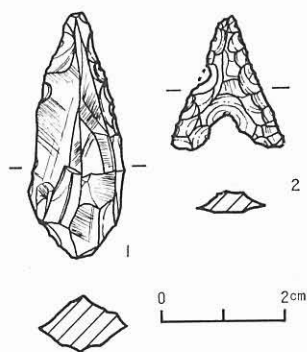


図2-2-20 蛙地遺跡出土の石器

る獣類が集まりやすく、また、狩りのしやすい場所でもあったことをよくしめしている。これらの遺跡からは、土器、石器、剥片類が採集されているが、土器には、九州系統の土器がみられ、また、石器では、冠山(広島)や金山(香川)産出の安山岩と姫島(大分)、隠岐(島根)産出の黒曜石が多く使われている。金山、姫島のように熊野町から直線距離にして一〇〇キロを超え、隠岐のように二〇〇キロも離れた遠い場所で産出する石材が持ちこまれていることは、当時からかなり広い